遺徳をたたえる安藤祭り

―200年記念大祭開催―

今から205年前の文化年間、郡家地域を襲った大干ばつの影響で凶作が続き、水不足に悩む農民を救うため、私財を投げうって、総延長10・8㎞におよぶ「安藤井出」を完成させた、安藤伊右衛門の遺徳をたたえる「安藤祭り」が9月30日（土）、郡家集落で盛大に開催されました。

今年は、安藤井出完成200年の節目の年となり、祭り前には安藤墓と安藤碑（役場本庁舎前）に200本の竹灯籠が設置されました。

また、郡家駅「ぷらっとぴあ・やず」では、安藤井出の年表やルートの紹介をはじめ、郡家西小学校4年生の安藤井出見学感想文や八頭高等学校郷土研究部による紙芝居の展示などが行われました。

祭り当日は、14時に祭り開始を告げる音花火が打ち上げられ、華やかな衣装に身を包んだ郡家東区、中・北区、西区の踊り子連が一斉に出発。それぞれの屋台を引きながら各所で踊りを披露し、集落内を練り歩きました。夕方になると3つの連が郡家駅前に集結。激しく雨が降りしきる中行われた一斉踊りの様子を一目見ようと、郡家駅前は傘をさした大勢の観覧者で埋め尽くされました。

安藤井出が地域の皆さんとともに刻んできた歴史をお祝いしますとともに、これからも安藤祭りが人と人をつなぎ、地域を元気にする祭りとして受け継がれていくことを祈念します。

会場がひとつになった一斉踊り

郡家西区の調和のとれた手踊り

郡家中・北区の勇壮な鳴子踊り

郡家東区の華やかな舞

緑の豊かさも守ろう

15 陸の豊かさも守ろう
ゴール15

八頭町の面積は鳥取県内で6番目に大きく、206・71㎢あります。扇ノ山をはじめとする数々の山から流れ出る水は、源流から多数の河川へとつながり海へ流れていきます。水の恵みは豊かな森林のスポンジのような保水効果（水源涵養）によってもたらされています。また、温室効果ガス削減効果など、森林は多面的な機能を有しています。

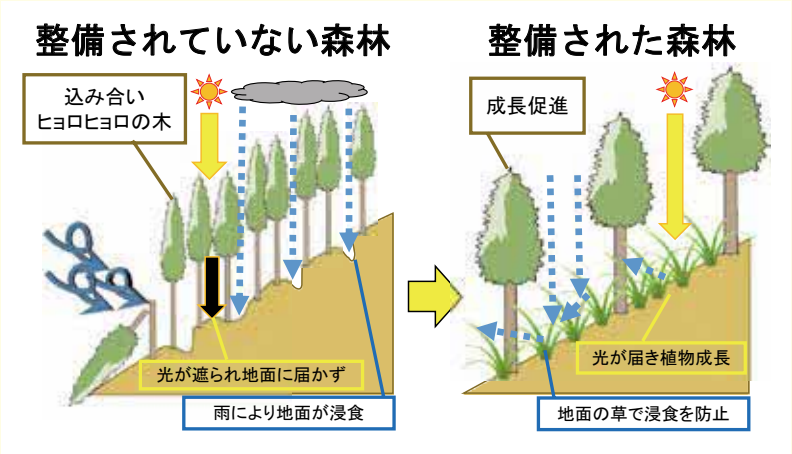
今回は、町の約8割（165・57㎢）を占めている森林に改めてスポットを当てます。

森林整備の必要性

林業の採算性の低下や森林所有者の高齢化、担い手不足、所有者不明などにより、整備されない人工林（スギやヒノキ等植林された森林）が増えています。整備されない人工林は、下の図のように木と木が込み合い幹が細く風害に弱くなります。

また、生い茂る葉が日光を遮ることで地面に植物は生えなくなり、土がむき出しになることで雨に侵食されやすいなど、災害に弱い森林となってしまいます。

整備し間引くこと（間伐）によって幹は太く成長し、加えて木の隙間から光が届き地面に植物が生え、雨の衝撃を吸収して、災害に強い本来の山がよみがえっていきます。



八頭町の人工林の約8割は利用可能な時期を迎えています。これからは、伐って植えて育てるという循環型の林業経営（皆伐再造林）を推進していく必要があります。

八頭町森林・林業ビジョン

豊かな山の資源を次世代に残そうと町は令和2年10月「八頭町森林・林業ビジョン」を策定しました。

現在の森林・林業の課題を整理し「繋げよう八頭の森林を未来へ」のスローガンのもと、①森林を営む②森林の恵を活かす③森づくりを担う人を育てるの3本柱を掲げ、事業に取り組んでいます。

八頭町の取り組み

12 つくる責任 つかう責任
ゴール12

町の特色ある取り組みのひとつに、幼少期から「木」に愛着を持ってもらおうと、令和2年から「八頭町誕生祝い積み木等贈呈事業」を展開しています。

保健センターで実施する6カ月児健診で、八頭町産のスギやヒノキで作られた「木のおもちゃ」をプレゼントしています。健診日の直前に作られるため木の香りが漂い、子どもたちが触れて遊ぶのに適した温かみのあるおもちゃで、贈られた方からは木材に対して親しみが増したなど、好評をいただいています。

八頭町産ひのき使用
「積み木セット」

八頭町産すぎ使用
はたらくくるま「とらっく」

11 住み続けられるまちづくりを
ゴール11

私たちは自然と緑豊かな環境にたくさんの恩恵を受けて生活をしています。森林の役割を再認識し、森林の保全に取り組むことで、持続可能なまちづくりを目指します。